

入選

目は口ほどに

愛媛県 今治明德中学校

二年 村上 陽向

朝から毎日毎日、新聞やテレビのニュースで、新型コロナウイルスの感染者数の増加や、医療現場の様子が報道されている。小学校の卒業式も、中学校の入学式も規模が縮小されたし、手洗い、うがい、手指の消毒やマスクの着用など、基本的な感染対策をしないといけない生活が続いている。これからどうなっていくのか想像することもできないので、不安でいっぱいだ。

中学校生活が始まって1年半たつが、友だちとは初めて会ったときから、ずっとみんなの顔はほぼマスク越しで、目元しか見ることができない。はじめのうちは、お互いの表情がわかりづらいので、相手が自分のことをどう思っているのか正確に判断できないと思っていた。

しかしこの前、なにも言っていないのに突然、

「大丈夫？ なにかあった？」

と、友だちが心配そうに話しかけてきた。目を見ただけで、いつもと違うと気づいたらしい。その日の朝、私は母親とささいなことで口論になって、解決しないまま登校した。どうやって仲直りしようかと、ずっと考えていて、少し落ち込んでいた。

そのことを誰かに相談したわけでもなかったのに、友だちは私の変化に気づいてくれて、なにげない声かけと優しい笑顔で、私は元気をもらうことができた。そして、実際に会って相手の目を見て話すこと、視線を交わすことがとても大切だとわかった。

特に笑顔は、安心感と話しやすい雰囲気を作る最大の武器になる。目や眉の動きは、口元がマスクで隠れていても、感情が表に現れると思った。「目は口ほどにものを言う」、「目は心の窓」という言葉を実感することができた。

私は、それから友だちの目を見て、相手の気持ちを推し量りながら、ゆっくりと話すようになった。そして、マスクをしていないころは、あまり考えずに話をしていたかもしれないと感じるようになった。意外にも、マスクをしている今の方が、相手の気持ちがわかるような気がする。

また、友だちも私のいうことをよく理解してくれる気がする。マスクをせず、顔全体を見ながら話すことが、本来の人の姿かもしれない。それをあたりまえだと思っていたが、たとえそれができなくても、私たちはお互いの感情や気持ちを理解し合うことができる。

コロナの流行によって、日常的に生活が制限されることも多くなったが、あたりまえのことがあたりまえにできる幸せに感謝すること、相手を思いやることの大切さを知ることができた。

このまま、コロナがいつまでも収まることがなければ、もしかしたら、みんなの顔全体をしっかりと見ることができないまま、中学校生活が終わってしまうのではないかと考えると、やっぱり寂しい。

そうならないように、今、私はなにをすべきかを考えて、いつも慎重に行動していこうと思った。